

余談伝犬八

内田魯庵

青空文庫

一 『八犬伝』と私

昔は今ほど忙しくなくて、誰でも多少の閑があつたものと見える。いわゆる大衆物はやはり相応に流行して読まれたが、生活が約しかつたのと多少の閑があつたのとで、買うよりは貸本屋から借りては面白いものは丸写しか抜写しをしたものだ。殊に老人のある家では写本が隠居仕事の一つであつたので、今はもう大抵潰されてしまつたらうが私の青年時代には少し旧い家には大抵お祖父さんが曾祖父さんとかの写本があつた。これがまた定つて當時の留書とかお触とか、でなければ大衆物即ち何とか実録や著

名の戯作だいげさくの抜写しであつた。無論ドコの貸本屋にも有る珍らしくないものであつたが、ただ本の価を儉約するばかりでなく、一つはそれが趣味であつたのだ。私の外曾祖父がいそうそふの家にも（今では大抵屏風の下貼や壁の腰張やハタキや手ふき紙になつてしまつたが）この種の写本が本箱に四つ五つあつた。その中に馬琴の『美少年録』や『玉石童子訓ぎよくせきどうじくん』や『朝夷巡島記あさいなしまめぐりのき』や『俠客伝』があつた。ドウしてコンナ、そこらに転がつてる珍らしくもないものを叮嚀に写して、手製とはいへ立派に表紙をつけて保存する氣になつたのか今日の我々にはその真理が了解出来ないが、ツマリ馬琴に傾倒した愛読の情が溢あふれたからであるというほかはない。私の外曾祖父というは決して戯作好きげさくずの方ではなかつた。少し常

識の桁けたをはずれた男で種々の逸事が残つてゐるが、戯作好きだとい
う咄はなしは残つていないからそれほど好きではなかつたろう。事実ま
た、外曾祖父の遺物中には馬琴の外は刊本にも写本にも小説は一
冊もなかつた。ただ馬琴の作は上記以外自ら謄写したものが二、
三種あつた。刊本では、『夢想兵衛』と『八犬伝』とがあつた。
ひつきよう 畢 竟 するに戯作が好きではなかつたが、馬琴に限つて愛読し
て筆写の労をさえ惜しまず、『八犬伝』の如き浩漣こうかんのものを、
さして買書家でもないのに長期にわたつて出版の都度々々購読す
るを忘れなかつたというは、当時馬琴が戯作を呪う間にさえ愛読
というよりは熟読されて『八犬伝』が論孟学庸や『史記』や『左
伝』と同格に扱われていたのを知るべきである。また、この外曾

祖父が或る日の茶話に、馬琴は初め儒者を志したが、当時儒学の宗たる柴野栗山しばのりつぎんに到底及ばざるを知つて儒者を断念して戯作の群に投じたのであると語つたのを小耳に挟んで青年の私に咄はなした老婦人があつた。だが、馬琴が少時栗山に学んだという事は『戯作者六家撰』に見えてるが、いつ頃の事かハッキリしない。医を志したというは自分でも書いてるが、儒を志したというは余り聞かない。真否は頗る疑わしいが、とにかく馬琴の愛読者たる士流の間にはソナ説があつたものと見える。当時、戯作者といえは一括して輕薄放漫なる瞶がいがいしや々者流として顰ひんしゆく蹙しゆくされた中に単ひとり馬琴が重視されたは学問淵源があるを信ぜられていたからである。

私が幼時から親しんでいた『八犬伝』というは即ちこの外曾祖

父から伝えられたものだ。出版の都度々々書肆しよしから届けさしたという事で、伝来からいうと発行即時の初版であるが現品を見ると三、四輯までは初版らしくない。私の外曾祖父は前にもいう通り、『美少年録』でも『侠客伝』でも皆謄写した気根の強い筆ふでまめ豆の人であつたから、『八犬伝』もまた初めは写したに相違ないが、前数作よりも一層感嘆措おかなかつたので四、五輯頃から刊本で揃えて置く氣になつたのであろう。それからが出版の都度々々届けさしたので、初めの分はアトから補つたのであろう。私の外曾祖父というのは戯作好きでも書物好きでも、勿論学者でも文雅風流の嗜たしなみがあるわけでもないただの俗人であつたが、以て馬琴の當時の人氣を推すべきである。

このお底かげに私は幼時から馬琴に親しんだ。六、七歳頃から『八犬伝』の挿絵を反覆して犬士の名ぐらいは義経・弁慶・亀井・片岡・伊勢・駿河と共に諳そらんじていた。富山とやまの奥で五人の犬の男を手玉に取った九歳の親兵衛しんべえの名は桃太郎や金太郎よりも熟していた。したがってホントウに通して読んだのは十二、三歳からだろうがそれより以前から拾い読みにポツポツ読んでいた。十四歳から十七、八歳までの貸本屋學問に最も夢中であつた頃には少なくとも三遍位は通して読んだので、その頃は『八犬伝』のドコかが三冊や四冊は欠かさず座右にあつたのだから会心の個処は何遍読んだか解らない。（私には限らない、当時の貸本屋フワンは誰でもだつたが）信し乃のが澁こ我がへ発足する前晚浜路はまじが忍んで来る一節や、

あらめやま おとね
 荒芽山の音音の隠れ家に道節と莊介が邂逅する ひとくんだり
 たまがえし
 返壁の里に雛衣が去られた夫を怨ずる一章は一言一句を剩
 さず暗記した。が、それほど深く愛誦反覆したのも明治二十一、
 二年頃を最後としてそれから以後は全く一行をだも読まないで、
 何十年振りでもた読み返すとちやうど出稼人が都会の目眩しい町
 から静かな田舎の村へ帰ったような気がする。近代の忙だしい騒
 音や行き塞づまった苦悶を描いた文芸の鑑賞に馴れた眼で見るとまる
 で夢をみるような心地がするが、さすがにアレだけの人気を買っ
 た話上手な熟練と、別してドツシリした重味のある力強さを感じ
 しめるは古今独歩である。

二 『八犬伝』および失明後終結

『八犬伝』は文化十一年、馬琴四十八歳の春肇じょうしゅう輯しゅう五冊を発行し、連年あるいは隔年に一輯五冊または六、七冊ずつ発梓はっしし、天保十二年七十五歳を以て終結す。その間、年けみを閲する二十八、巻かん帙ちつ百六冊の多きに達す。その氣根の大なるは東西古今に倫りんを絶しておる。もしただ最初の起筆と最後の終結との年次をのみいふならばこれより以上の歳月を閲したものもあるが、二十八年間絶えず稿を続けて全く休息した事がない『八犬伝』の如きはない。僅かに『神稲水滸伝』がこれより以上の年月を費やしてこれより以上の巻を重ねているが、最初の構案者たる定岡の筆に成るは僅

かに二篇十冊だけであつて爾余は我が小説史上余り認められない作家の続貂狗尾ぞくちようくびである。もつともアレだけの巻数を重ねたのはやはり相当の人氣があつたのであろうが、極めて空疎な武勇談を反覆するのみで曲亭の作と同日に語るべきものではない。『八犬伝』もまた末尾に近づくにしたがつて強弩きやうどの末魯縞ろこうを穿つたわざる憾みうらみが些いささかないではないが、二十八年間の長きにわたつて喜寿に近づき、殊に最後の数年間は眼疾を憂い、終に全く失明して口授代筆くじゆせしめて完了した苦辛慘憺を思えば構想文字に多少の倦怠のあるは止むを得なからう。とにかく二十八年間同じ精力を持続し、少しもタルミなく日程を追つて最初の立案を（多少の変更あるいは寄道よりみちはあつたかも知れぬが）設計通りに完成終結し

たというは余り聞かない——というよりは古今に例のない芸術的
 労作であろう。無論、芸術というは蟻が塔を積むように長い歲月
 を重ねて大きなものを作るばかりが能事ではない。が、この大根
 氣、大努力も決して算籌さんちゆうがい外には置かれないので、単にこの点
 だけでも『八犬伝』を古往今来の大作として馬琴の雄偉なる大だいし
 手筆ゆひつを推讃せざるを得ない。

殊に失明後の労作に到つては尋常芸術的精苦以外にいかなる障し
ようがい碍がいにも打ち勝つてますます精進した作者の芸術的意氣の壮さかん
 なる、真に尊敬するに余りがある。馬琴が右眼に故障を生じたの
 は天保四年六十七歳の八、九月頃からであつたが、その時はもと
 より疼痛を伴わなかつたのであろう、余り問題としなかつたらし

い。が、既に右眼の視力を奪われたからには、霜を踏んで堅氷到るで、左眼もまたいつ同じ運命に襲われるかも計り難いのは予期されるので、決して無関心ではいらなかったろう。それにもかかわらず絶倫の精力を持続して『八犬伝』以外『美少年録』をも『侠客伝』をも稿を続けて連年旧の如く幾多の新版を市場に送っておる。その頃はマダ右眼の失明がさしたる障碍を与えなかったらしいのは、例えば岩崎文庫所蔵の未刊藁こうほん本『禽鏡』の（本文は失明以前の筆写であつても）失明の翌年の天保五年秋と明記した自筆の識語を見ても解る。筆力が雄健で毫ごうも窘きんじゆう澁あとの痕が見えないのは右眼の失明が何ら累をなさなかつたのであろう。

馬琴は若い時、医を志したので多少は医者的心得もあつたらし

い。医者の不養生というほどでもなかったろうが、平生頑健な上に右眼を失つてもさして不自由しなかったので、一つはその頃は碌な町医者がなかったからであろう、碌な手当もしないで棄て置いたらしい。が、不自由しなかったという条、折には眼が翳^{かす}んだり曇つたりして不安に脅かされていたのは『八犬伝』巻後の『回^{かい}外^{がい}剩^{じやう}筆^{ひつ}』を見ても明らかである。曰く、「（戊^{つちのえ} 戌^{えい} 即ち天保九年の）夏に至りては愈々その異なる^{こと}を覚えしかども尚悟らず、こは眼鏡^{めがね}の曇りたる故ならめと謬^{あやま}り思ひて、俗^よに本玉^{ほんたま}とかいふ水晶製の眼鏡の価^{たか}貴^いきをも厭^{いと}はで此^{これ}彼^{かれ}と多く購^{あが}ひ求めて掛替々々凌ぐものから（中略、去歲^{こぞ}庚子^{かのえね}即ち天保十一年の）夏に至りては只朦々朧々として細字を書く事^え得^えならねば其^{その}稿本を五

つくだり

行の大字にしつ、其も手さぐりにて去年の秋九月本伝第九輯

四十五の巻まで綴り果し」とあるはその消息を洩らしたもので、

口授ではあるが一字一句に血が惨み出している。その続きに「第

九輯百七十七回、一顆の智玉、途に一騎の驕將を懲らすといふ

一段を五行或は四行の大字にものしぬるに字行もシドロモド

ロにて且墨の続かぬ処ありて読み難しと云へば其を宅眷に補はせ

などしぬるほどに十一月に至りては宛がら雲霧の中に在る如く、

又朧月夜に立つに似て一字も書く事得ならずなりぬ」とて、た

だ筆硯に不自由するばかりでなく、書画を見ても見えず、僅か

に昼夜を弁ずるのみなれば詮方なくて机を退け筆を投げ捨てて

嘆息の余りに「ながらふるかひこそなければ見えなくなりし書巻川

に猶わたる世は」と詠じたという一節がある。何という凄^{せい}惻^{そく}の
 悲史であらう。同じ操觚^{そうこ}に携わるものは涙なしには読む事が出来
 ない。ちょうどこの百七十七回の中途で文字がシドロモドロとな
 って何としても自ら書く事が出来なくなつたという原稿は、現に
 早稲田大学の図書館に遺存してこの文豪の悲痛な消息を物語つて
 おる。扇^{おうぎ}谷^が定^{やつ}正^{さだ}が水軍全滅し僅かに身を以て遁^{のが}れてもなお
 陸上で追い詰められ、漸く助^{すけ}友^{とも}に助けられて河^{かわ}鯉^{こい}へ落ち行く
 条^{くだり}にて、「其馬をしも船に乗せて隊^{てせい}兵——」という丁の終りまで
 はシドロモドロながらも自筆であるが、その次の丁からは馬琴の
 媳^{よめ}の宗^{そう}伯^{はく}未亡人おミチの筆で続けられてる。この最終の自筆は
 シドロモドロで読^よみ辛^{づら}いが、手^て搜^{さぐ}りにしては形も整つて七行に書

かれている。（視力の完全な時は十一行、このアトを続けたおミチのは十行。）中には『回外剩筆』にある通り、四行五行に、大きく、曲りくねって字間も一定せず、^{へんつくり}偏と旁が重なり合ったり離れ過ぎたりして一見盲人の書いたのが点頭^{うなず}かれるものもある。中にはまた、手搜りで指の上に書いたと見え、指の痕が白く抜けてるものもある。古今詩人文人の藁本の今に残存するものは数多くあるが、これほど文人の悲痛なる芸術的の悩みを味わわせるものはない。

が、悲惨は作者が自ら筆を持つ事が出来なくなつたというだけで、意気も氣根も文章も少しも衰えていない。右眼が明^{めい}を失つたのは九輯に差掛つた頃からであるが、馬琴は著書の楮余^{ちよよ}に私事を

洩らす事が少なくないに拘わらず、一眼だけを不自由した初期は愚か両眼共に視力を失ってしまつてからも眼の事は一言もいわなかつた。作者の私生活と交渉のなかつた単なる読者は最後の『回外剩筆』を読むまでは恐らく馬琴が盲したのを全く知らなかつたろう。一体が何事にも執^{しゅう}念^ねく、些細な日常瑣事にすら余りクドクド言い過ぎる難があるが、不思議に失明については思^{おも}切^{いきり}が宜^よかつた。『回外剩筆』の視力を失つた過程を述べるにあたつても、多少の感慨を洩らしつつも女々しい繰言を繰り返さないで、かえつて意気のますます軒昂たる本^{もちまへ}来^この剛愎^{こうへき}が仄見えておる。全く自ら筆を操る事が出来なくなつてからの口授^{くじゆさく}作^{さく}にも少しも意氣消沈した痕が見えないで相変らずの博^{はく}引^{いん}旁^{ぼう}証^{しやう}をして気

焰を揚げておる。馬琴の衞学癖げんがくへきは病膏盲やまいこうもうに入いつたもので、無
 知なる田夫野人でんぶやしんの口からさえ故事来歴を講釈せしむる事が珍らし
 くないが、自ら群書を渉獵する事が出来なくなつてからも相変ら
 ず和漢の故事を列ならべ立てるのは得意の羅大經らたいけいや『瑯琊代醉篇』
 が口を衝ついて出いづるので、その博覽強記が決して俄仕込にわかじこみにあら
 ざるを証して余りがある。

かつ『八犬伝』の脚色は頗る複雑して事件の経緯は入り組んで
 いる。加うるに人物がそれぞれの歴史や因縁で結つばれてるので、
 興味に駆られてウカウカ読んでる時はほぼ輪廓を掴つかんでるように
 思うが、細かに脈絡を尋ねる時は筋道が交錯さくさくしていて彼我の關係
 を容易に弁識し難い個処がある。総じて複雑した脚色は当の作者

自身といえども往々混錯して往々迷路に彷徨するは、あたかも自分の作つたラビリンスに入つて出口を忘れるようなものだ。一度死んだ人間を無理に蘇^{いきかえ}生らしたり、マダ生きてるはずの人間がイツの間にかドコかへ消えてしまつたり、一つ人間の性格が何遍も変るのはありがちで、そうしなければ纏まりが附かなくなるからだ。正直に平たく白状したなら自分の作つた脚色を餅に搗^ついた経験の無い作者は殆んどなからう。長篇小説の多くが尻切^{しりきれ}蜻^{とん}蜒^ぼである原因の過半はこれである。二十八年の長きにわたつて当初の立案通りの過程を追つて脚色の上に少しも矛盾撞着を生ぜしめなかつたのは稀に見る例で、作者の頭腦の明澄透徹を証拠立てる。殊に視力を失つて単なる記憶に頼るほかなくなつてからで

も毫も混錯しないで、一々個々の筋道を分けておのおの結末を着けたのは、例えば名将の隊伍を整えて軍を収むるが如くである。

第九輯卷四十九以下は全篇の結末を着けるためであるから勢いダレる気味があつて往々閑却されるが、例えば信乃が故主成氏こしゅうしげうじの俘われを釈かれて国へ歸るを送つていよいよ明日は別れるという前夕、故主に謁して折からのそば降る雨の徒々つれづれを慰めつつ改めて宝剣を献じて亡父の志を果す一条の如き、大塚匠おおつかしやうさく作父子の孤忠および芳流閣の終曲として余情嫋々じやうじやうたる限りなき詩趣がある。また例えば金光寺門前の狐竜の化石（第九輯卷五十一）延命院の牡丹の弁（同五十二）の如き、馬琴の得意の涅槃論であるが、馬琴としては因縁因果の解決を与えたのである。馬琴の人

生観や宇宙観の批評は別問題として、『八犬伝』は馬琴の哲学諸相を綜合具象した馬琴宗しゅうの根本經典である。

三 『八犬伝』総括評

だが、有体ありていに平たくいうと、初めから二十八年と予定して稿を起したのではない。読者の限りない人気に引き摺られて次第に延長したので、アレほど膨大な案を立てたのでないのはその巻数の分け方を見ても明らかである。本来読よみほん本は各輯五冊で追って行くを通則とする。『八犬伝』も五輯までは通則通りであつたが、六輯は一冊増して六冊、七輯は更に一冊加えて七冊、八輯は一度

に三冊を加えて十冊とした。九輯となると上中下の三帙ちつを予定し、上帙六冊、中帙七冊、下帙は更に二分して上下両帙の十冊とした。それでもマダ完結とならないので以下は順次に巻数を追うことにした。もし初めからアレだけ巻数を重ねる予定があつたなら、一輯五冊と正確に定めて十輯十一輯と輯の順番を追って行くはずで、九輯の上だの下だの、更に下の上だの下だのと小面倒な細工をしないでも宜よかつたろうと思う。全部を二分して最初の半分が一輯より八輯まで、アトの半分が総九輯というようなコンナ馬鹿々々しい巻数付けは『八犬伝』以外には無い。これというのは畢ひつきよう

竟、モウ五冊、モウ三冊と、次第にアトを引き摺られてよんどころなしに巻数を増したと見るほかはない。

例えば親兵衛が京都へ使いする一条の如き、全く省いても少しも差支ない贅^{ぜい}疣^{ゆう}である。結城^{ゆうき}以後影を隠した徳用^{とくよう}・堅削^{けんさく}を再出して僅かに連絡を保たしめるほかには少しも本文に連鎖の無い独立した武勇談である。第九輯卷二十九の巻初に馬琴が特にこの京都の物語の決して無用にあらざるを強弁するは当時既に無用論があつたものと見える。一体、親兵衛は少年というよりは幼年というが可なるほどの最年少者であつて、豪傑として描出するには年齢上無理がある。勢い靈玉^{きどく}の奇特^{ふせひめがみ}や伏姫神^{ふせひめがみ}の神助がやたらと出るので、親兵衛武勇談はややもすれば伏姫^{ふせひめがみ}靈驗^{れいげんき}記になる。他の犬士の物語と比べて人間味が著しく稀薄であるが、殊に京都の物語は巽風^{そんふう}・於菟子^{おとこ}の一節を除いては極めて空虚な少年武勇

伝である。

本来『八犬伝』は百七十一回の八犬具足ぐそくを以て終結と見るが当然である。馬琴が聖嘆せいたんの七十回本『水滸伝』を難じて、『水滸』の豪傑がもし方臘ほうろうを伐つて宋朝に功を立てる後談がなかったら、『水滸伝』はただの山賊物語となってしまうと論じた筆法をそのまま適用すると、『八犬伝』も八犬具足で終つて両管かんれい領との大戦争に及ばなかったらやはりただの浮浪物語であつて馬琴の小説観からは恐らく有終の美を成さざる憾うらみがあろう。そういう道学的小説観は今日ではもはや問題にならないが、為永春水輩はいでさえが貞操や家庭の団だんらんらんの教師を保護色とした時代に、馬琴ともあるものがただの浮浪生活を描いたのでは少なくも愛読者たる士君

子に對して申訳が立たないから、勲功記を加えて以て完璧たらしめたのであろう。が、『八犬伝』の興趣は穂北ほきたの四犬士の邂逅かいこう、
船虫ふなむしの牛裂うしぎき、五十子の焼打で最頂に達しているのです、八犬具
足で終わつてゐるのは馬琴といえどもこれを知らざるはずはない。
畢竟するに馬琴が頻りに『水滸』の聖嘆評を難詰しばしば屢々するは
『水滸』を借りて自ら弁明するのではあるまいか。

だが、この両管領との合戦記は、馬琴が失明後の口授作にもせ
よ、『水滸伝』や『三国志』や『戦国策』を襲踏した痕が余りに
歴々として『八犬伝』中最も拙陋せつろうを極めている。一体馬琴は史
筆椽てんだい大を以て称されているが、やはり大まかな荒っぽい軍記物
よりは情緒細やかな人情物に長じておる。線の太い歴史物よりは

『南柯夢』や『旬殿実々記』のなんかのゆめような心中物に細かい纖巧な技術を示しておる。『八犬伝』でもあなが浜路やはまじ雛衣のひなきぬ口説くどきが称讃されてゐるのは強ち文章のためばかりではない。が、戦記となるとまるで成っていない。ヘタな修羅場しゅらば読よみと同様ただ道具立を列ならべるのみである。葛西かさい金町かなまちを中心としての野戦の如き、彼我の五、六の大將が頻りに一騎打の勇戦をしているが、上杉・長尾・千葉・澁我らを合すればかなりな兵数になる軍勢は一体何をしていたのか、喊ときの声さえ挙げていないようだ。その頃はもうかなり戦術が開けて来たのだが、大將株が各自てんでに自由行動を取っていて軍隊などでは有るのか無いのか解らない。これに對抗する里見勢もまた相当の数だろうが、ドダイ安房あわから墨田河原すみだがわら近くの戦線までかなりな道

程をいつドウいう風に引牽いんけんして来たのやらそれからして一行も書いてない。水軍の策戦は『三国志』の赤壁をソツクリそのままに踏襲したので、里見の天海てんかいたる、大や防禦使の大角だいかくまで引つ張り出して幕下でも勤まる端役を振り当てた下したごしらえは大掛りだが、肝腎の合戦は音音おとねが仁田山晋六にたやましんろくの船を燐やいたのが一番壮烈で、数千の兵船を焼いたというが児供こどもの水鉄砲くらいの感じしか与えない。扇谷家第一の猛者小幡東良おばたはるよしが能登守教経のとかみのりつね然たる働きをするほかは、里見勢も上杉勢も根ツから動いていない。定正がアツチへ逃げたりコツチへ逃げたりするのも曹操そうそうが周瑜ゆに追われては孔明こうめいの智なきを笑うたびに伏兵が起る如き巧妙な作才が無い。軍記物語の作者としての馬琴は到底『三国志』

の著者の沓くつの紐ひもを解くくの力もない。とはいふものの『八犬伝』の舞台をして規模雄大の感あらしめるのはこの両管領との合戦記であるから、最後の幕を飾る場面としてまんざら無用でないかも知れない。

が、『八犬伝』は、前にもいう通り第八輯で最高頂に達し、第九輯卷二十一の百三十一回の八犬具足で終わっている。それより以下は八犬後談で、切り離すべきである。（私の梗概がその以下に及ばないのはこの理由からである。）『八犬伝』の本道は大塚から市川いちかわ・行徳ぎやうとく・荒芽山あらめやまと迂廻ほきたして穂北へ達する一線である。その中心点が大塚と行徳と荒芽山である。野州路やしゆうじや越後えち路ごじはその裏道で甲斐かいの石和いさわや武蔵むさしの石浜いしはまは横路である。富山や

京都は全く別系統であつて、富山が八犬の発祥地であるほかには本筋には何の連鎖もない。地理的にいえば、大塚と行徳と荒芽との三地点から縄を引つ張つた三角帯が『八犬伝』の本舞台であつて、この本舞台に登場しない犬江（親兵衛は行徳に顔を出すが大子役であつて一人前になつていない）・犬村・犬阪の三犬士は役割からはむしろスケ役である。なかんずく、その中心となるのは信乃と道節とで、『八犬伝』中最も興味の深い主要の役目を勤めるのは常にこの二人である。

一体八犬士は余り完全過ぎる。『水滸伝』中には、鶏を盗むを得意とする時遷じせんのような雑輩を除いても黒旋風こくせんふうのような怒つて乱暴するほかには取柄とりえのない愚人もあるが、八犬士は皆文武の才

があつて智慮分別があり過ぎる。その中で道節が短氣で粗忽そこつで一番人間味がある。一生定正を君父の仇と覘ねらつて二度も失敗やりそこなつてゐる。里見の防禦使となつて堂々対敵しても逃路に待ち伏せする野武士のような役目を振られて、シカモ首尾よく取り逃がしてこみなとさかん小水門目輩じゆし孺子をして名を成さしめてゐる。何をやらしてもヘマばかりするところに道節の人間味がある。道節を除いては、小文吾が曳手ひくて・単節ひとよを送つて途中で二人を乗せた馬に駈け出されて見失つてしまつたり、荒野猪あれいのししを踏み殺して牙きばに掛けられた獵師を助けたはイイが、恩を仇の泥棒獵師の女房にコロリと一杯喰つてアベコベにフン縛しばられる田舎相撲らしい総身に知恵の廻り兼ねるドジを時々踏むほかは、皆余りに出来過ぎている。なかんずく、

親兵衛に到つて極まる。

『八犬伝』には幾多の興味ある挿話がある。例えば船虫の

一生の如き、単なる一挿話とするには惜しい話材である。初めは

行き暮れた旅人を泊らしては路銀を窃む悪獵師の女房、次には媳

いびりの猫化郷士の妻、三転して追剥の女房の女按摩となり、

最後に折助の嬬となつて亭主と馴れ合いに賊を働く夜鷹となり、

牛裂の私刑に波瀾の多い一生の幕を閉ずる一種の変態性格であ

る。これだけでも一部の小説とするに足る。また例えば素藤の

如き、妙椿が現れて幻術で助けるようになってはツマラない

が、浮浪の盜賊からとにかく一城の主となつた経路には梟雄

の智略がある。妙椿の指金で里見に縁談を申し込むようになった

ては愚慢の大將であるが、里見を初め附近の城主を籠罩ろうとうして城主の位置を承認せしめたは尋常草賊の智恵ではない。馬琴はとかくに忠孝の講釈をするので道学先生視されて、小説を忌む鳩毒ちんどくに等しい文芸憎悪者にも馬琴だけは除外例になつて感服されてるが、いずくんぞ知らん馬琴は忠臣孝子よりは悪漢淫婦を描くにヨリ以上の老熟を示しておる。『美少年録』が（未完成ではあるが）代表作の一つである『弓張月』よりもかえつて成功しているはその一例である。

四 『八犬伝』の歴史地理

馬琴は博覽強記を称されもすれば自ら任じもした。殊に歴史地理の考証については該博精透なる尋究を以て聞えていた。正当なる歴史を標榜する史籍さえ往々不穿鑿ふせんさくなる史実を伝えて毫も怪しまない時代であるから、ましてや稗官はいかん野乗やじようがよい加減な出鱈目たらめを列べるのも少しも不思議はない。馬琴自身が決して歴史の参考書として小説を作ったのではないのは明らかで、多少の歴史上の錯誤があつたからとて何ら文芸上の価値を累るいするに足らないのである。馬琴の作が考証精覈せいかくで歴史上または地理上の調査が行届いてるなぞと感服するのは鼻肩ひいきの引倒しで、馬琴に取つてはこの上もない難有ありがた迷惑であらう。ただ馬琴は平素の博覽癖から何事も精くわしく調査したらしき思われる処に損もあり得もある。『房

『総志料』を唯一の手品の種子箱たねとする『八犬伝』の歴史地理の穿鑿さくの如きはそもそも言うものの誤りである。余り偏痴氣論を振り廻したくないが、世間には存外な鼯鼠うしの引き倒しもあるから、ただ一個条憎まれ口を叩いておこう。（無論『八犬伝』の光輝はソナナ大向うの半はん暈じようで曇らされるのではない。）

金碗かなまりだいすけ大輔やっふさが八房やっふさもろとも伏姫をも二つ玉で撃留うちとめたのは

この長物語の序開きをするセラエヴォの一発となつてゐるが、日本に鉄砲が伝来したのが天文十二年であるは小学校の教科書にも載つてゐる。もつとも天文十二年説は疑問で、数年前にも数回歴史家の間に論争されたが、たといそれ以前に渡つたものがあつたにしてもそれよりおよそ八十年前の（伏姫が死んだ年の）長ちやうろく緑ろくの

二年に房州の田舎武士の金碗大輔がドコから鉄砲を手に入れたらう。これを始めに『八犬伝』には余り頻繁に鉄砲が出過ぎる。白井の城下で道節が上杉勢に囲まれた時も鉄砲足輕が筒を揃えて道節に迫った、曳手・単節が荒芽山を落ちる時も野武士に鉄砲で追われた、網苧の賜平茶屋にも鉄砲が掛けてあつた、甲斐の石和の山の中で莊官木工作が泡雪奈四郎に鉄砲で射殺された。大詰の大戦争の駢馬三連車も人を驚かせるが、この踊り屋台然たる戦車の上に六人の銃手が銃口を揃えてるのは凄まじい。天下の管領の軍隊だから葡萄牙人よりも先に何百挺何千挺の鉄砲を輸入しても妨げないが、野武士や追剥までが鉄砲をポンポン撃つのは余り無鉄砲過ぎる。網苧の山里の立場茶屋に猪嚇しの鉄砲が

用意してあるほどなら、道節も宝刀を捻ひねくり廻して居い合あ拔ぬきの口上のような駄弁ろを弄ろうして定正に近づこうとするよりもズドンと一発ブツ放した方が余程早手廻しだったろう。

こういうと偏痴氣論になる。小説だもの、鱻ふかしち七ななが弁慶ながの長ながみしも上下で貧乏徳利をブラ下げて入鹿御殿くだに管くだを巻こうと、芝居や

小説にいちいち歴史を持出すのは余程な大白痴おおばかで、『八犬伝』の鉄砲もまた問題にならない。が、ウソらしいウソは問題にならないが、ホントウらしく聞えるウソは小説だと思つても欺かされるから問題になる。弁慶の七つ道具の中にピストルがあつたといつても誰も問題にしないが、長祿に安房の田舎武士が鉄砲かを持っていたという、ちよつと首を傾かしげさせる。いわんや説話者が博覧の

穿鑿好きたる馬琴であるから、眉に唾をつけながらも考えさせられる。

鉄砲は暫らくお預けとして、長祿という太田道灌おおたどうかんが江戸城を築いた年である。『八犬伝』には道灌は影になつてゐるが、道灌の子の助友は度々顔を出してゐる。江戸は『八犬伝』の中心舞台で、しの信乃が生れ額藏がくぞうが育つた大塚おおつかを外にしても神田かんだとか湯嶋ゆしまとか本郷ほんごうとかいう地名は出るが「江戸」という地名は見えない。江戸城を匂わせるような城も見えない。両管領との大戦争に里見方は石浜いさはら、五十子いさこ、忍しの岡が、大塚の四城を落しているが、その地理的位置が江戸城を懷おもわせるようなのではない。もつとも江戸城などは有つても無くても『八犬伝』の本筋には少しも関係しないが、

考証好きの馬琴が代る代るに犬士をこの地方に遍歴^{へめぐ}らさして置いて江戸城を見落さしたのを不思議に思う。

前にもいったが、『八犬伝』の中心舞台は安房よりも江戸であつて、事件が多くは江戸あるいは江戸人に親しみのある近国で発展したのが少なくも中央都人士^{とじんし}の興味を湧かした原因の一つである。殊に一番人気のある信乃を主役として五犬士の活躍するは、大塚を本舞台として巢鴨^{すがも}・池^{いけぶくろ}・袋^{たき}・滝^{がわ}の川^{おうじ}・王子^{また}・本郷に跨^{また}が
る半円帯で、我々郊外生活者の遊歩区域が即ち『八犬伝』の名所旧蹟である。一体大塚城というのはドコにあつたろう？ そんな問題を出すのがそもそも野暮のドン詰りであるが、もともと城主の大石というのが定正の裨将^{ひしょう}であるから、城と称するが実は陣^じ

屋んやであろう。いわゆる「飯盛めしもりも陣屋ぐらいは傾ける」程度の飯盛相当の城であろう。ところで、城にしろ陣屋にしろどの辺であるか見当が附かぬが、信乃が幼時を過ごした大塚は、信乃の家の飼犬が噛み殺した伯母の亀かめざさ篠の秘蔵猫ちなに因んで橋名を附けられたと作者が考証する簸川ひかわの猫股橋ねこまたばしというのが近所であるから、それから推して氷川田圃たんぼに近い、今の地理的考証から推して氷川田圃に近き今の高等師範の近辺であろう。莊助の額蔵が処刑されようとした庚申塚こうしんづかの刑場も近く、信乃の母が滝の川の岩屋へ日参したという事蹟から考えても高等師範近所と判断するが当たっているだろう。

ところで信乃がいよいよ明日は濟我こがへ旅立つという前晚、川狩

へ行つて墓ひきろく六の詭計に陥はめられて危あぶなく川底へ沈められようと
 し、左母二郎に宝刀を摩替すりかえられようとした神宮川かにはがわというは古
 名であるか、それとも別に依よりどころ拠のある仮作名であるか、一体
 ドコを指すのであろう。信乃が滝の川の弁天へ参詣した帰路に偶
 然邂逅であつたように趣向したというのだから、滝の川近くでなけれ
 ばならないので、多分荒川のおだい小台の渡し近辺であらう。仮にそう
 定めて置いて、大塚から点燈ひともし頃にテクテク荒川くんだりまで出
 掛け、水の中で命のやりとりの大芝居をして帰ったのが亥いの刻過
 ぎたというから十時である。往返ゆきかえりをマラソンでヘビーを掛け、
 水中の実演を余程高速度で埒らちを明けなければとても十時には帰つ
 て来られない。が、荒川より近くには神宮川のような大きな川は

ない。

道節が火定^{かじよう}に入つた円塚山^{まるづかやま}というは名称の類似から本郷の

丸山だろ^うともいうし、大学の構内の御殿の辺だろ^うという臆説

もある。ドツチにしてももとが小説だから勝手な臆測が許される

が、左母二郎が浪路^{なみじ}を誘拐して駕籠^{かご}を飛ばして来たは大塚から真

直ぐに小石川の通りを富坂^{とみさか}へ出て菊坂あたりから板橋街道へ出

たものらしい。円塚山はこの街道筋にあるので、今の燕楽軒から

白十字・パラダイス・鉢の木が軒を並べるあたりが道節の寂^{じやく}寞^ま

道^{くどう}人^{じん}肩^{けん}柳^{りゆう}や浜路の史跡である。小説の史跡を論ずるのは極

楽の名所図会^{ずえ}や竜宮の案内記を書くようなものだが、現にお里の

釣瓶^{つるべ}鮎^{すし}のあとにも今なお連綿として残り、樋口の十郎兼光の逆櫓^{さかろ}

の松も栄え、壺阪では先年沢^{さわ}市の何百年遠忌^{おんき}だかを営んだ。

『八犬伝』の史蹟も石に勒して建てられる時があるかも知れない。
(市川附近や安房の富山には『八犬伝』の遺跡と伝えられる処が
既にあるという咄だ。)

が、そういう空想史蹟は暫く措いて、単なる地理的興味から見
て頗る味わうべきものがしばしばある。小文吾が荒猪を踏み殺し
たは鳥越^{とりごえ}であるが、鳥越は私が物心覚えてからかなり人家の密
集した町である。徳川以前、足利の末辺にもせよ、近くに山もな
いに野猪が飛び出すか知らん。(もつとも、『十方庵遊歴雜記』
に向嶋の弘福寺が境内寂寞としてただ野猿の声を聞くという記事
があるが、奥山の猿芝居の猿の声ではなさそうだ。)また、この

鳥越から海が見えるという記事がある。湯嶋の高台からは海が見えるから、人家まばらに草茫々と目に遮るものもないその頃の鳥越からは海が見えたかも知れぬが、ちよつと異な感じがする。

芳流閣の屋根から信乃と現八とが組打して小舟の中に転がり落ち、はずみに舳もやいづな綱が切れて行徳へ流れるというについて、湝こ我が即ち古賀からは行徳へ流れて来ないという説がある。利根の本筋だから引汐なら行徳へ流れないとも限らないが、古賀から行徳まではかなりの距離があつて水路が彎曲している。その上に中途の関宿せきやどには関所が設けられて船舶の出入に嚴重であつたから、大抵な流れ舟はここで抑留される。さもなくとも、川は曲りくねつて蘆荻ろてきが密生しているから小さな舟は途中で引つ掛つてしまう。

到底無事に行徳まで流れて来そうもない。

夷いしみの館山たてやま（素藤もとふじの居城）というは今も同じ地名の布施村

や国府台このうだいに近接する立山たてやまであろう。稲村まではかなりの里程

があつて、『八犬伝』でも一泊二日路であるが、妙椿が浜路を誘

拐するに幻術で雲にでも乗つて来たら宜さそうなもんだのに、小

脇に引つ抱えてズルんかズルんか引き摺つて来て南弥六なみろくに邪魔を

され折角誘拐して来た浜路を伏姫神霊に取り返される。素藤が初

め捕われて再拳を謀る間潜伏した山というはどの辺を指すのか解

らぬが、夷隅いすみは海岸を除いては全郡山地があるが山がすべて浅く

て且つ低くて人跡未到というような感じのある処はなさそうだ。

房総はすべて馬の背のような地形で、山脈が連亘れんこうして中央部を

走っているが、高山も大山もない。伏姫が山入した富山（トミサンと呼ぶ、トヤマでもトミヤマでもない）の如きも、『八犬伝』に形容されてるような高峻な山ではない。最高峰の観音堂は『八犬伝』に由ると義実よしさねの建立となってるが、寺記には孝謙天皇の御造立となっている。安房は国史にはかなり古いが、徳川氏が江戸を開く以前は中央首都から遠い辺陲へんすいの半島であつたから極めて歴史に乏しく、したがって漁業地としてのほかは余り認められていない。安房が著名になつたのは全く『八犬伝』以来であるから、『八犬伝』の旧蹟は準史蹟として見てもイイかも知れない。

（『八犬伝』の地理学は起稿当初の腹案であつたが、実地を踏査しなければ解らぬ個処が存外多いのですべて他日の機会に譲

ることにした。『八犬伝』地図も添ゆる予定であつたが、同じ理由で。）

五 馬琴の日記

『八犬伝』が日本の小説中飛び離れて挺ぬきんでている如く、馬琴の人物もまた嶄ざんぜん然として卓出している。とかくの評はあつても馬琴の如く自ら信ずるところ厚く、天下の師を以て任じたのは他にはない。古今作者を列べて著述の量の多いのと、なかなずく大作に富めると、その作の規模結構の大なると、その態度の嚴肅なると、その識見の高邁こうまいなると、よく馬琴に企て及ぶものは殆んど

ない。

が、作に秀でたのは、鯛よりは鰯の生きのイイ方が旨い、牡丹よりは菜の花の方が風情ふぜいがあるというと同じ好きす不喜欢ふすきを別として大抵異論はないが、人物となるとまた、古今馬琴の如く嫌われているのは少ない。或る雑誌で、古今文人の好き嫌いという題で現代文人の答案を求めたに對し、大抵な人が馬琴を嫌いというに一致し、馬琴を好きと答えたものは一人もなかった。ただに現代人のみならず、その当時からして馬琴は嫌われていた。正面から馬琴に怨声を放って挑戦したのは京山きやうざん一人であつたが、少なくとも馬琴が作者間に孤立してゐて余り交際しなかつた一事に徴するも、馬琴に對して余り好感を持つものがなかつたのは推測おしはかられ

る。馬琴が交際していたのは同じ作者仲間よりはむしろ愛読者、殊に遠方の文書で交際するとのむらじようさい殿村篠斎の連中であつて親しくその家に出入して教を乞うものでなかつた。ただ文書を以て交際するだけなら折々小面倒で嫌氣いやきを生ずる事があつてもそれほど深く身に染しみないが、面と向つては容易に親しまれないで、小難こむずかしくて氣ブツセイで堪えられなかつたろう。とかくに氣難きむずかしくて機嫌の取りにくかつたのは、家人からでさえ余り喜ばれなかつたのを以てもその人となりを知るべきである。

京伝と仲たがひした真因は判然しないが、京山の『蜘蛛の糸巻』、馬琴の『伊波伝毛いわたものき之記』および『作者部類』を照らし合はれてみると、彼我のいうところ（多少の身勝手や、世間躰を飾つた

自己弁護はあつても）、みな真実であろう。馬琴が京伝やつたじゆ薦

重うの家を転々して食客となり、処女作『つかいはたしてにぶきようげん尽用而二分狂言』

に京伝門人大栄山人と署したは蔽い難い。僅か三歳でも年長者であるし、その時既に相応の名を成していたから、作者として世間へ乗り出すには多少の力を仰いだ事はあるうが、著作上教えられる事が余り多くあつたとは思われない。京伝門人と署したのは衣食の世話になつた先輩に対する礼儀であつて、師礼を執つて教を受けた関係でなかつたのは容易に想像される。玄関番の書生が主人を先生と呼ぶようなものだ。もつとも一字の師恩、一飯の恩という事もあり、主従師弟の厳やかましかつた時代だから、両者の関係が漸く疎隔して馬琴の盛名がオサオサ京伝を凌がんとすると京伝

側が余り快く思わぬは無理もないが、馬琴が京伝に頼った頃の何
 十年も昔の内輪咄うちわばなしを剔抉すつばぬいて恩人風を吹かし、人倫とはい
 難しとまで京山が罵るのは決して穏やかでない。小身であつても
 武家奉公をし、医を志した馬琴である。下駄屋にゆうふの入夫を嫌つて
 千蔭ちかげに入門して習字の師匠となつた馬琴である。その頃はもう黄
 表紙時代びようしと變つて同じ戯作げさくの筆を執つていても自作に漢文の序
 文を書き漢詩の像讃をした見識であつたから、昔を忘れたのは余
 り褒められないがほうかん幫間芸人に伍する作者の仲間入りを屑いさぎよしとし
 なかつたのは万更無理はなかつた。馬琴に限らず風来ふうらいなども戯
 作に遊んだが作者の仲間附合はしなかつたので、多少の見識ある
 ものは当時の作者の仲間入りを欲しなかつたのみならず作者から

もまた仲間はずれにされたのである。

だが、馬琴は出身の当初から京伝を敵手と見て競争していたので、群小作者を下目^{しため}に見ていても京伝の勝れた作才には一目置いていた。『作者部類』に、あの自尊心の強い馬琴が自ら、「臭^{くさぞ}

草紙^{うし}は馬琴、京伝に及ばず、読本^{よみほん}は京伝、馬琴に及ばず」と

案外公平な評をしているのは馬琴が一步譲るところがあつたからだろう。それと同様、『蜘蛛の糸巻』に馬琴を出藍の才子と称し、

「読本といふもの、天和^{てんな}の西鶴^{さいかく}に起り、自笑^{じしやう}・其磧^{きせき}・宝永^{ほうえい}正徳^{しょうとく}に鳴りしが馬琴には三舎すべし」と、京伝側を代表する京

山が、これもまた案外公平な説を立ててるのは、京伝・馬琴が両々相對して下らざる互角の雄と見做^{みな}したのが当時の公論であつた

のだろう。二人は遠く離れて睨み合つていても天下の英雄は使君
 と操とのみと互いに相許していたに違いない。が、京伝は文化十
 三年馬琴に先んじて死し、馬琴はそれ以後『八犬伝』の巻を重ね
 ていよいよ文名を高くし、京伝に及ばずと自ら認めた臭草紙でも
 『傾城水滸伝』や『金毘羅船』のような名篇を続出して、盛名
 もはや京伝の論ではなくなっている。馬琴としては区々世評の如
 きは褒貶共に超越して顧みないでも、たとえば北辰ほくしんその所に
 いて衆星これめぐを繞るが如くであるべきである。それにもかかわら
 ず、とかくに自己を挙げて京伝を貶へんする如き口吻こうふんを洩らすは京
 山のいう如く全くこの人にしてこの病ありで、この一癖が馬琴の
 鼎かなえの軽重を問わしめる。

馬琴の人物行狀の巨細こさいを知るにはかれの生活記録たる日記がある。この日記はイツ頃から附け初めイツ頃で終わつてゐるか知らぬが、今残つてゐるのは晩年の分である。あの筆豆から推せば若い時から附けていたに違ひないが、先年馬琴の家からひと纏めに某氏の手へ渡つた自筆文書の中には若い時の日記はない。この分は今、全部早稲田大学図書館に移管されている。震災に亡びた帝大図書館のは、ドコから買い入れたか出所來歴を知らぬがそれより以前に滝沢家から出たものらしい。マダそのほかにも散逸したものがドコかに残つてゐると思うが、所在を明らかにしない。帝大のは偶然館外に貸出してあつた一冊が震火を免かれて今残つてゐる。この一冊と早大図書館所蔵本とが今残つてゐる馬琴日記の全部である。

この早稲田本を早大に移る以前に抄録解説したのが饗庭篁村氏あえばこうそんの『馬琴日記抄』であつて、天保二年の分を全冊転印されたのが和田万吉氏の『馬琴日記』（原本焼失）である。

饗庭氏の抄録本もしくは和田氏の校訂本によつて馬琴の日記を読んだものは、誰でもその記載の事項が細大洩らさず綿密に認したためられたのを驚嘆せずにはいられない。毎日の天候気温、出入客来、他出等、尋常日記に載すべき事項のほか、祭事、仏事、音物いんぶつ、到来品、買物、近親交友間の消息、来客の用談世間咄、出入商人職人等の近事、奉公人の移り換、給金の前渡しや貸越や、慶庵や請人うけにんの不埒ふらち、鼠が天井で騒ぐ困り咄、隣りの猫にさかなを取られた不平咄、毎日の出来事を些細の問題まで洗いざらい落なく書き上

げておる。殊に原本は十五、六行の蠅頭ようとう細字で認めた一年一冊
およそ百余張ちようの半紙本である。アレだけの著述をした上にこれだ
けの丹念な日記を毎日怠らず附けた氣根の強さ加減は驚くに余り
ある。日記その物が馬琴の精力絶倫を語っておる。

更にその内容を検すると、馬琴が日常の極めて些細な問題にま
で、いちいち重箱の隅をホジクルような小理窟を列べてこだわる
氣難きむずかし屋であるに驚く。それもいいが、いつまでもサツパリし
ないでネチネチと際限なくごてる。ただ読んでさえ七しちむずかしい
のに弱らせられるんだから、あの氣難かし屋に捉まったら災難だ、
頭からガミガミと叱られるなら我慢し易いが、ネチネチとト口火
で油煎あぶらいりされるように痛めつけられたら精も根も竭つきて節々ふしぶし

までグタグタになってしまうと、恐れを成さずにはいられまい。馬琴がアレだけの学問技能を抱いて、アレだけの大仕事をして、アレだけの愛読者、崇拜者を持ちながら近づくものが少なくて孤立したのはあの気難かし屋からである。馬琴の剛愎高慢は名代なだいのもので、同時代のものは皆人もなげなる態度に腹を立つたものだろうだが、剛愎高慢は威張らして置けば済むからかえって御し易ぎよやすいが、些細な問題にいちいち角を立ててその上にイツマデも根に葉に持っていられたり、あるいは意地悪婆さんの嫁いびりのように、ネチネチ、チクチクとやられてはとても助からない。和田君の校訂本を読んだものは誰も直ぐ気が付くが、馬琴の家の下婢の出代りの頻繁なのは殆んど応接に違いとまあらずだ。その度毎に給金の

前渡しや貸越が必ず附帶する。それんばかりの金をくれてしまつたらと思うが、馬琴は寸毫も仮借しない。いちいち請人を呼びつけて嚴重に談じつける。鄙吝ひりんでもあつたろうが、鄙吝よりは下女風情に甘く嘗なめられてはという難むずかし屋の理窟屋の腹の虫が承知しないのだ。一体馬琴の女房のお百というがなかなかの難物らしかったが、その上に主翁の馬琴が偏屈人の小言幸兵衛こごとこうべえと来ては女中の尻の据わらなかつたのも無理はない。馬琴の家庭は日記の上では一年中低気圧に脅かされ通しで、春風駘たい蕩とうというような長閑どかなユツクリとした日は一日もなかつたようだ。老妻お百と媳よめのお道との三角葛藤はしばしば問題となるが、馬琴に後暗い弱点がなくとも一家の主人が些細な家事にまでアア七しちむずかしい理窟を

こねるようでは家が悶^もめる。馬琴はただに他人ばかりでなく家族にさえも余り喜ばれなかった苛細冷酷な偏屈者であつた。

一言すれば理窟ばかりで、面白味も温^{あたたかみ}味もない冷たい重苦

しい感じのする人物だつた。世辞も愛嬌もないブツキラ棒な無愛想な男だつた。崇拜者も相応に多くて、遙々遠方から会いに来る人もあつたが、木で鼻を括^{くく}つたような態度で面白くもない講釈を聞かされ、まかり間違えば叱^{こゝと}言を喰つたり揚足を取られたりするから一度で懲り懲りしてしまう。アレだけ綿密につけた日記に客と共に愉快そうに談笑した記事が殆んど見えない。家族と一緒に遊びに出掛けたはおろか、在宿して団^{だんらん}樂の歡樂に興じた記事もまた見えない。馬琴は二六時中、操觚^{そうこ}に没頭するか読書に耽る

かして殆んど机に向かったぎりで家人と世間咄一つせず、叱言をいう時のほかは余り口を利かなかつたらしい。

家人に対してさえこれだからましてや他人に対してお上手をいうような事はなかった。『蜘蛛の糸巻』に、恩人の京伝の葬式には僅かばかりの香料を包んで代理に持たせて自分は顔を出さなかつたくせに、自分が書画会をする時には自筆の扇子せんすを持って叩頭おしぎに来たと、馬琴の義理知らずと罵っている。が、葬式的一条はともかく、自分の得とくになつても叩頭をする事の大嫌いな馬琴が叩頭に來たというは滅多にない珍らしい事だ。つまり世渡り下手へたで少しもお上手を知らなかつたので、あながち義理知らずばかりでもなかつた。

ひと口にいうと馬琴は無調法者だった。口前くちさきの上手な事をい

うのは出来なかったよりも持前の剛愎が許さなかった。人の感情を毀こわすナゾは余り問題にしなかったから、人と衝突するのは馬琴の生涯には珍らしくなかった。これにつき京伝と馬琴との性格の差を現わす一例がある。京伝もまた相当な見識を具えてひと癖もふた癖もあったが、根が町家生れで如才なく、馬琴と違って酸すいも甘いも心得た通人だったから人をそらすような事は決して做しなかつた。『優曇うどんげ華物語』の喜多武清きたぶせいの挿画が読者受けがしないで人氣が引立たなかった跡を豊国とよくにに頼んで『桜姫全伝』が評判になると、京伝は自分の作が評判されるのは全く挿絵のお庇かだと卑下して、絵が主、作が従だと豊国を持上げ、豊国絵、京伝作と巻

尾の署名順を顛倒^{てんとう}さした。事実、臭草紙は勿論、読本^{よみほん}にしても挿絵の巧拙善悪が人気に関するが、独立した絵本と違って挿画は本文に従属するのみならず図柄の意匠配置等は通例作者の指揮に待つを常とするから画家は従位にあつて主位に居るべきものではない。豊国の似而非高慢^{えせ}が世間の評判を自分の手柄に独占しようとするは無知な画家の増長慢としてありそうな咄だ。が、京伝は画工^{えかき}が威張りたいたいなら威張らして置いて署名の順位の如きは余り問題にしなかった。

馬琴はこれに反して画家の我儘を決して許さなかった。馬琴は初め北斎と結託して馬琴の挿画は北斎が描くを例とした。ところが『弓張月』だったか『水滸画伝』だったかの時、無論酒の上の

元氣か何かであろう、馬琴の本が売れるのは俺の挿画が巧いからだ
 だと北斎が傲語した。さア、馬琴が承知しない、俺の本の挿画を
 描かせるから人からヤレコレいわれるようになったのを忘れたか
 と、それぎり二人は背中合せとなった。ドツチも鼻梁はなつばりの強い
 負け嫌いの天狗同志だから衝突するのは無理はない。京伝だつた
 ら北斎に花を持たして奇麗に負けてやつたろう。

が、馬琴には奇麗サツパリと譲つてやる襟度きんどが欠けていた。奉
 公人にさえ勘弁出来ないで、些細な不行届ふゆきとどきにすら請人を呼び付
 けてキュウキュウ談じつけないければ腹の虫が慰いなかつたのだから、
 肝癖かんぺきの殿様の御機嫌を取るツモりでいるものでなければ誰とで
 も衝突した。一つは馬琴の人物が市井しせいの町家の型に適はまらず、戯作

者仲間の空気とも、容れなかつたからであろう。馬琴が蒲生君がもうくんぺ平や渡辺崋山かざんと交際したのはそれほど深い親密な関係ではなかつたろうが、町家の作者仲間よりはこういう士人階級の方がかえつて意気投合したらしい。が、君平や崋山としばしば音信した一事からして馬琴に勤王の志があつたと推断するのは馬琴最眞が箔をつけようための牽強説である。ツイこの頃も或る雑誌で考証されていたが、こういう臆断は浪花節なにわぶしが好きだから右傾、小劇場の常連だから左傾と臆測するよりもっと早呑み込み過ぎる。

六 『八犬伝』の人物咏題

が、馬琴の人物がドウあろうとも作家として日本が産み出した最大者であるは何人も異議を挟むを許されない公論である。『八犬伝』がまた、ただに馬琴の最大作であるのみならず、日本にあつては量においても質においても他に比^{ひちゆう}儔するもののない最大傑作であるは動かすべからざる定説である。京伝・馬琴と便宜上並称するものの実は一列に見難いものである。沙^{シェイクスピア}翁は文人

として英国のみならず世界の最大の名で、その作は上下を通じて^{あまね}洽く読まれ、ハムレットやマクベスの名は沙翁の伝記の一行をだも読まないものにも諳^{そら}んぜられている。日本で沙翁と推されるのは作物の性質上^{ちかまつそうりんし}近松巢林子であつて、近松は実に馬琴と駢^{なら}んで日本の最大者である。が、近松の作の人物が^{あまね}洽く知られているは

舞台に上せられて知られたので、その作が洽く読まれているからではない。『八犬伝』はこれに反してその作が洽く読まれて誰にも知られているから、淨瑠璃ともなれば芝居ともなったのである。恐らく古今を通じてかくの如く広く読まれ、かくの如く洽く伝唱されてるのは比類なからう。

したがって『八犬伝』の人物は全く作者の空想の産物で、歴史上または伝説上の名、あるいは街談口説くぜつの舌頭ぜつとうに上つて伝播された名でないのかかわらず児童走卒にさえ諳んぜられている。かくの如きは余り多くない例で、八犬士その他の登場人物の名は歴史にあらざる歴史を作つて人名字書中の最大の名よりもヨリ以上に何人にも知られておる。橋本蓉塘翁がかつてこの人物を詠題

として作った七律二十四篇は、あたかも『八犬伝』の人物解題となっておる。抄して以て名篇を結ぶのシノプシスとする。

雨窓無聊ぶりよう、たまたま内子ないし『八犬伝』を読むを聞いて戯れに
二十首を作る

橋本蓉塘

金碗かなまりたかよし孝吉

風雲慘澹として旌旗せいぎを捲く

仇讎きゆうしゆうを勦滅そうめつするは此時に在り

質を二君に委ぬ原と恥づる所 身を故主こしゆうに殉ずる豈悲あにしむを

須またん 生前の功は未だ麟閣りんかくに上らず 死後の名は先づ豹皮ひようひ

を留む 之これ子生涯快心の事 呉ごを亡ぼすの罪を正して西施せいしを斬る

玉梓たまづき

亡国の歌は残つて玉樹空し 美人の罪は麗花と同じ 紅鵲血は
そそ しゅんじよう 灑ぐ春城の雨 白蝶魂は寒し秋塚の風 死々生々業滅し
うらみ 難し 心々念々恨何ぞ窮きわまらん 憐れむべし房総佳山水 渾すべて魔
 雲障霧の中に落つ

伏姫ふせひめ

念珠一串いつかん 水晶明らか 西天を拝し罷やんで何ぞ限らんの情 只道
かじん ひとえ 下佳人命偏に薄しと 寧ろ知らん 毒婦恨平らぎ難きを 業ごうふ
ところ 風過ぐる処花空しく落ち 迷霧開く時銃忽ち鳴る 狗子何ぞ曾かつ
 て仏性無からん 看かんきん 経声裡三生を証す

犬塚信乃いぬつかしの

芳流傑閣勢ひ天に連なる 奇禍危きに臨んで淵を測らず 跬きほ歩敢

て忘れん慈父の訓

飄ひょうれい零れい枉まげて受く美人の憐み

宝刀一口ひとふり

良価を求む

貞石三生宿縁を証す

未だ必ずしも世間偉士無から

ざるも

君が忠孝の双全を得るに輸つくす

浜路はまじ

一陣の罡こうふう風

送春を断す

名花空しく路傍の塵に委す

雲鬢影うんかん

を吹いて緑地に粘でんす

血雨声無く紅巾に沁しむ

命薄く刀下の鬼と

なるを甘んずるも

情は深くして豈意中あにの人を忘れん

玉蕭ぎよくしよう

幸ひに同名字あつて 当年未了の因を補ひ得たり

犬川いぬかわそうすけ莊助

忠胆義肝

匹ひつちゆう儔

稀なり

誰か知らん奴隸それ名流なるを

蕩とうろ

郎う枉むすびげて贈る同心の結

嬌客俄に怨首えんしゆしゆう讎

となる

刀下冤えんを

呑んで空しく死を待つ　獄中の計愁うれいを消すべき無し　法場も若し諸
人の救ひを欠かば　争いかでか威名八州を振ふを得ん

沼ぬい藺

残燈影裡刀光閃めく　修羅闔一場を現出す　死後の座は金きん　菖かんたん
を分ち　生前の手は紫鴛鴦しえんおうを繡ぬふ月げつちん　秋水珠を留める涙　花
は落ちて春山土亦香またばし　非命すべか須らく薄命に非ざるを知るべし

夜台長く有情郎に伴ふ

犬いぬやまどうせつ山道節

火遁の術は奇にして蹤尋ねあと回しかた　荒芽山畔日将ひまさにしず　まんとす　寒
光地に迸ほとばしつて刀花乱る　殺氣人を吹いて血雨淋りんたり　予讓衣よじようを
撃つ本意に非ず　伍員墓ごいんをあば発あにく豈初心ならん　品川に梟きようじ示りす竜

頭ゆうとうの青かぶと 想見る当年怨毒の深きを

曳手・単節ひくて ひとよ

荒芽山畔路叉あらめやまはんまたまたを成す 馬を駆て 帰かえりきた 来る日斜かたがき易し 虫ちゆうし

唧よく 淒涼夜月に吟ず 蝶魂れいたん 冷澹秋花を抱く 飄ひようれい 零 暫く寓す

神仙の宅 禍乱早く離る夫婿さか ふうせいの家 頼さいわひに舅姑きゆうこの晩節を存する

あり 欣然寡かを守つて生涯を送る

犬田小文吾いぬたこぶんご

夜深うして劫ごうを行ふ彼何の情ぞ 黒闇々中刀に声あり 圈けんとう套姦

婦の計を逃れ難し 拘こうしゆう 囚 未だ侠夫の名を損ぜず 对たいぎゆう 牛楼

上無状を嗟さす 司馬しば はままえ 浜前に不平を洩らす 豈た翔ただ路傍狗鼠くそちゆうを誅

するのみならん 他年東海長鯨を撃せいす

ふなむし
船虫

閉花羞月好手姿 巧計人を賺あざむいて人知らず 張婦李妻定所無し

西眠東食是れ生涯 秋霜肅殺す刀三尺 夜月淒涼たり笛一枝 天
網そ疎と雖ども漏得難し 閻王廟裡擒きんに就く時

いぬさかけの
犬坂毛野

造次ぞうじ何ぞ曾て復讎を忘れん 門に倚よりて媚こびを献これず是權謀 風雲帳裡

無双の士 歌舞城中第一流 警けいたく柝たたく声は む寒かんちよう の月 残燈

影は冷やかなり 峭しょうろう楼の秋 十年剣を磨す徒爾とじに非ず 血家血

髑髏を貫き得たり

いぬかいげんはち
犬飼現八

弓を杖ついで 胎内たいないくぐり竇の中を行く 胆略なんぷと何人か能く卿に及ば

ん 星斗満天しん森として影あり 鬼きりん燐半夜ひらめ閃いて声無し 当時武芸

前に敵無し 他日奇談世ことごと尽く驚く 怪へきえきまず千軍皆辟易するを

山精木魅さんせいぼくみ威名を避く

犬いぬむらだいかく村大角

猶ほ遊人の話頭を記する有り 庚申山こうしんやまは閱けみす幾春秋 賢妻生き

て灑そそぐ熱心血 名父めいふ死して留む枯髑髏 早く猩しやうど奴名姓を冒すを

知らば 応まさに犬子仇讐を拝する無かるべし 宝珠是れ長く埋没す

べけん 夜々精光斗牛を射る

雛ひなぎぬ衣

満まんしゆう袖啼痕血痕に和す 冥途敢て忘れん阿郎の恩を 宝刀を掣と

将りもつて非命を嗟さす 靈珠を弾了して宿しゆくえん冤を報ず 幾幅の羅裙らくくん

都て蝶に化す 一牀繡被籠駕を尙ふ 庚申山下無情の土 佳

人未死の魂を埋却す

いぬえしんべえ
犬江親兵衛

多年剣を学んで霊場に在り 怪力真に成る鼎扛ぐべし 鳴鏑雲

を穿つて咆虎斃る 快刀浪を截つて毒竜降る 出山 赤手強敵

を擒にし 擁節の青年大邦に使ひす 八顆の明珠皆楚宝 就中一

顆最も無双

みようちん
妙椿

八百尼公技絶倫 風を呼び雨を喚ぶ幻神の如し 祠辺の老樹精

萃を蔵す 帳裡の名香美人を現ず 古より乱離皆数あり 当年

の妖祟 豈因無からん 半世売弄す懷中の宝 靈童に輸与す良玉

珠

里見氏八女

ひつぱい
匹配百両王姫を御す　この　ここに　とつおのおの
之子子に帰ぐ各宜きを得　偕かいろう老他年白

髪を期す　同心一夕紅糸を繋ぐ　大家終に団欒の日あり　名士豈

遭遇の時無からん　人は周南詩句の裡うちに在り　夭桃満面好手姿

ちゆだい
、大

こうべめぐら
名士頭を回せば即ち神仙　卓は飛ぶ関左跡　飄ひようぜん然　鞋花笠雪三

もく
千里　雨に沐し風に梳る数十年　縦たとひ妖魔をして障碍を成さしむ

るも　古仏因縁を証する無かるべけん　明珠八顆すべ都て收拾す　想

より　まろ
ふ汝が心光地に凭て円きを

さとみよしなり
里見義成

依然形勝関東を控ふ 劍豪犬士の功に非ざる無し 百里の江山掌
 握に帰す 八州の草本威風に偃ふす 驕將敗を取るは車戦に由る
 赤壁名と成すは火攻の為めなり 強隣を圧服する果して何の術ぞ
 工夫ただ英雄を攪みだるに在り

『八犬伝』を読むの詩 補

おばゆきよしろう
 姥雪与四郎・音音 おとね

乱山何いずれの処か残燐を吊ちようす 乞ふ死是れ生真なりがた 叵命紅顔
 の双寡婦 奇縁白髪の両新人 洞房の華燭前夢を温め 仙窟の煙
 霞老身を寄す 鍊れんこう汞服沙一日に非ず 古木再び春に逢ふ無かる

可けん

かわこいごんのかみ
河鯉権守

そ
夫れ遠謀禍殃を招くを奈ん

しょうへん
牆 辺 耳あり隄防を欠く 塚中血

みどり
は化す千年碧なり 九外屍は留む三日香ばし 此老の忠心 皷

あすい
日の如し 阿誰貞節凜として秋霜 也た知る泉下遺憾無きを

ひつぎかつ
櫬を舁ぐの孤兒戦場に趁く

ひきたもとふじ
墓田素藤

とうかい
南面孤を称す是れ盜魁 匹として蜃氣楼堂を吐くが如し 百

そうぼく せいきゆう
年の艸木腥 丘を余す 数里の山河劫灰に付す 敗卒庭に

あつ
聚まる真に幻矣 精兵寶を潜る亦奇なる哉 誰か知らん一滴黄金

水 翻つて全州に向つて毒を流し来る

さとみよしさね
里見義実

百戦孤城力支へず 飄零何れの処か生涯を寄せん 連城且擁す三
 州の地 一旅俄に開く十匹の基ひ 霊鵠書を伝ふ約あるが如し
 神竜海を攪す時無かる可けん 笑ふ他の豎子貪慾を逞ふする
 へいてき
 を閉糴終に良將の資となる

以上二十四首は『蓉塘集』中の絶唱である。漢詩愛誦家の中にはママ諳んずるものもあるが、小説愛好者、殊に馬琴随喜者中に知るものが少ないゆえ抄録して以てこの余談を結ぶ。

(昭和三年四月仏誕会)

青空文庫情報

底本：「南総里見八犬伝（十）」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年7月16日第1刷発行

底本の親本：「南総里見八犬伝 下」日本名著全集刊行会

1928（昭和3）年

※旧仮名によると思われる引用文のルビの拗音、促音は、小書きにしませんでした。

入力：しだひろし

校正：川山隆

2009年8月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八犬伝談余

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>